

未来の食料問題の解決に挑む 「ありがたい『2050年の食卓』」を産官学民が議論

“2050年の食卓”について、話し合いませんか？



国連の推計によると、2050年には世界人口は98億人に達します。この急速な人口増加に伴う食料危機に学界や政策、産業界がどう応えていく

のか、近年社会的関心が高まりを見せています。このテーマを共に考えるCHANCE構想の一環として、3月25日に人類の心もおなかも満たす「ありがたい『食』の未来」の実現に取り組む産官学民のネットワークング会を開催しました。



「2050年の食卓～CHANCEネットワークング会～」当日の様子

CHANCEとは

JSTは2018年から産業界や国、研究機関、民間などと共に未来の社会をデザインし、その実現に向けたシナリオを描く枠組み「未来社会デザイン・オープンプラットフォーム(CHANCE)」を立ち上げました。こうありがたいという未来像をイメージし、それに向けてどのような基礎研究やサービス、社会システムが必要かを議論し、産官学民の協働の基盤をつくらうとするものです。社会課題の解決やありがたい未来像への貢献を目指した研究開発の成果が、より良い形で世の中に出ていくよう、研究目標の設定(研究の入り口)や、研究成果の社会実装(出口)の過程で産官学民を超えた連携を進めています。

目指す姿

- SDGs達成、Society 5.0実現への貢献
- 明るく活力に溢れた未来社会とそこに住む人類の幸福(well-being)に向けた「共創」



CHANCE*構想と賛同機関(2019年4月現在)
*CHALLENGE-driveN Convergence Engine
<https://chance-network.jp/index.html>

「食」をテーマにした今回は、食品関連企業や投資家、人文社会学系・理工学系の研究者、行政機関などから約50人が参加しました。



上段左からネットワークング会の共同企画者でファシリテーターの田瀬和夫代表取締役CEO(SDGパートナーズ)、竹内昌治教授(東京大学生産技術研究所)、日比野愛子准教授(弘前大学人文社会学部)、阿良田麻里子教授(立命館大学食マネジメント学部)、畠山寿之エグゼクティブプロフェッショナル(味の素グローバルコミュニケーション部)※所属は開催日時点。

ネットワークング会の数日前に、未来社会創造事業においてサイコロステーキ状のウシ筋組織を作製することに世界で初めて成功したと発表した竹内教授。予見される食料不足や現在の食料生産システムの環境負荷を解決する策として培養肉の研究開発の重要性を述べました。新しい食の社会受容性を研究する日比野准教授は、人工物を自然または不自然とする感覚は文化や地域によって大きな違いがある点に言及しました。イスラム教徒の食選択の課題に詳しい阿良田教授も、ハラール認証(戒律にのっとった食であることを保証する)の難しさを例に消費者が自ら選べる情報提供を充実させる必要性を訴えました。食品メーカーで研究に取り組んできた畠山エグゼクティブプロフェッショナルも、「食」は身体や精神の安定だけでなく人との関係をつくるものであり、「おいしさ」は社会が持続する鍵であると指摘しました。

参加者との議論では「なぜ食べるのか」の問いかけから始まり、近年の社会変化が「孤食」など食生活の変化や、次世代の食卓が必要とする、栄養、食品としてのニーズを超えた「おいしさ」を共有する場をどう支えるかを考える必要があること、また、発酵技術など日本の食文化の特徴には世界に新しく発信できる価値があるのではないかとといった意見が交わされました。革新的な食は、誰がどのように作り、世の中に出ていくかも大きく影響することから、多角的な視点による対話を継続する必要性が共有されました。アンケートでは参加者の9割が「有益だった」と回答し、約6割から「現在または新たなビジネスや活動につながる議論ができた」との声が聞かれました。

ネットワークング会から生まれた、学界、政策関係者、産業界をつなぐ顔の見える関係性から具体的なプロジェクトが生まれることが期待されます。

第1回 輝く女性研究者賞(ジュン アシダ賞)募集中

JSTは多様な人材の活躍を推進する取り組みの1つとして、女性研究者を応援しています。

日本では研究者に占める女性の割合がいまだに低く、研究開発プログラムなどへの参画も少ない状況にあります。そこで、持続的な社会と未来に貢献する優れた研究などを行っている若手女性研究者、そして女性研究者の活躍を推進している機関を表彰する「輝く女性研究者賞(ジュン アシダ賞)」を創設しました。ファッションデザイナーの故芦田淳氏が設立した芦田基金より、副賞が提供されます。

選考は、研究実績の他、人材育成、環境整備といった社会貢献などから総合的に判断されます。同時に、他機関のモデルとなるような機関を表彰することもこの賞の特徴です。

応募締切は6月30日(日)で、自薦・他薦とも受け付けています。受賞者の発表は10月上旬、表彰式はサイエンスアゴラ2019開催に合わせて11月16日(土)または17日(日)を予定しています。



輝く女性研究者賞(ジュン アシダ賞)フライヤー。赤い服を着た女性が交差点を歩く様子が描かれています。その道に光を当てることで、女性研究者の進む先が明るい未来になるようにとの願いを表しています。

輝く女性研究者賞(ジュン アシダ賞)
<https://www.jst.go.jp/diversity/about/award/index.html>

未来のコミュニケーションをデザインしたい 若きビジョナリーたちの挑戦が始まる

新しいビジョンを描く力、多種多様な人との共創によって起こるイノベーションに注目し、若い才能を発掘、支援するプロジェクト「未来館ビジョナリーキャンプ」が日本科学未来館(東京・お台場)で3月の3日間行われました。

「2030年のコミュニケーション」をテーマに、未来のコミュニケーションがどうあってほしいか、実現するにはどんな方法があるかを、「ビジョナリー」=「未来へのビジョンを持ち、実現に向けて周囲を巻き込み、自ら行動できる人」として集まった15~26歳の若者たちが、研究者やクリエイター、エンジニアたちと熱く語り合いました。

37人のビジョナリーたちは、自分が考えるコミュニケーションの問題とその解決へ向けたビジョンの共有を通してチームを結成し、実現したい未来を発表しました。

優秀チームは3チーム。そのうち「チーム家族」は、2030年でも人間同士のコミュニケーションはなくならないが、家族の形は今より多様化していると予想しました。そこで足音など家族の気配をデータ化し、物理的な距離を越えて家族のぬくもりを感じられるアイデア「オー

ダーメイドメディア」を提案しました。

3チームは今後、研究者やクリエイター、未来館のサポートを受けながらアイデアを形にし、今年10月より日本科学未来館の常設展示として1年間公開します。プロジェクトを通して共に未来を創る挑戦が始まっています。



「チーム家族」発表の様子